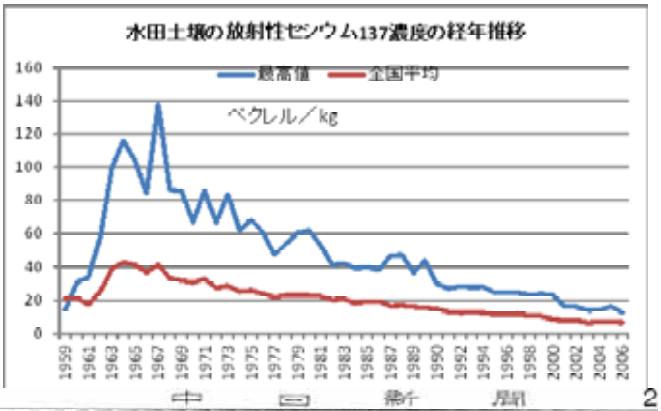
従って、1960 年（昭和 35 年）頃より以前に生まれた人達は日本全国どこに住んでたとしても放射性セシウム 137 の内部被曝は受けているはずで、生涯内部被曝線量は多いだろうと推測します。

核実験が盛んに繰り返されていた 1950 年代の放射能飛散のデータを探したのですが、残念ながら入手出来ませんでした。ただ一つフランスの地球汚染調査隊が北極の氷に閉じ込められていた放射能を調査した、氷は縦に穴お開け調査すると年代別のサンプルが調査できる方法なのですが、調査の結果 1950 年代の放射能汚染は、チェルノブイリ原発事故で放出した放射性物質汚染よりも 3 倍以上の放射性物質を世界中にまき散らしていたことが判明してをります。

核実験は 1960 年代～ 1970 年が最多で大量の放射性物質が世界中に放出されたのです。放出されたセシウム 137 が降雨とともにウラン 235 の熱中性子核分裂により直接生成する場合の核分裂収率は、セシウム 137 は、0.06 %に過ぎないが、ヨウ素 137（半減期 24.5 秒）は 2.6 %、キセノン 137（半減期 3.82 分）は 3.2 %生成し、その他テルル 137（半減期 2.5 分）0.39 %などを含めて、これら短寿命核種がβ腺を放出して崩壊しセシウム 137 となってしまう、累積の核分裂収率は 6.2 %となる。

原発事故で飛散した放射性物質で最も多いのは、放射性ヨウ素（I-131）ですが半減期が 8 日ですから、10 ヶ月経った年末では完全に零レベルになりました。

ですから原発事故から 10 ヶ月以上経ちましたので残るは憎きセシウム 137 ですが、半減期が 30 年ですから、30 年後に半分（1/2）、60 年後に 1/4 になるのですから、零になることはありません。



汚染わら肉牛が食べると？

セシウム 1割弱が蓄積

稲わらを食べた牛の放射性セシウム蓄積のイメージ

人が摂取した場合
少量であれば影響なし

大気中に飛散したセシウム 137 は降雨と共に地上に落下し、植物や土壌に付着、水に流されても放射能が消えるわけではなく、放射腺を放射し続けます。

付着した落ち葉等を焼却してもセシウフ 137 が消滅することはなく、かえって大気へ放射するだけです。

農作物は、土壌に付着したセシウムは植物の根から吸収されたり、直接付着したり多く